

# 別れ霜

樋口一葉

青空文庫



## 第一回

莊子が蝶の夢といふ世に義理や誠は邪魔くさし覺め際まではと引しむる利慾の心の秤に  
 は黄金といふ字に重りつきて増す寶なき子寶のうへも忘るゝ小利大損いまに初めぬ覆  
 車のそしりも我が梶棒には心もつかず握つて放さぬ熊鷹主義に理窟はいつも筋  
 違なる内神田連雀町とかや、友囀りの喧しきならで客足しげき呉服店あ  
 り、賣れ口よければ仕入あたらしく新田と呼ぶ苗字そのまゝ暖簾にそめて帳場格子にや  
 に下るあるじの運平不惑といふ四十男赤ら顔にして骨たくましきは薄醬油の鱈鯨に  
 育ちて世のせち辛さなめ試みぬ附け渡りの旦那株とは覺えざりけり、妻はいつ頃なくなり  
 けん、形見に娘只一人親に似ぬを鬼子とよべど鳶が産んだるおたかとして今年二八のつぼ  
 みの花色ゆたかにして匂濃やかに天晴れ當代の小町衣通ひめと世間に出さぬも道理  
 か荒き風に當りもせばあの柳腰なにとせんと仇口にさへ噂し連れて五十稻荷の縁  
 日に後姿のみも拜し得たる若ものは榮譽幸福上やあらん卒業試験の優等證  
 は何のものは國會議員の椅子にならべて生涯の希望の一つに數へいるゝ學生

もありけり、さればこそ一たび見たるは先づ驚かれ再び見たるは頭やましく駿河臺の杏  
 やううんだう そのころなうびやうくわんじや 雲堂に其頃脳病患者の多かりしこと一つに此娘が原因とは商人のする  
 かけね と 掛直なるべけれど兎に角其美は争はれず、姿形のうるはしきのみならで心さまのやさ  
 しさ情の深さ いとたけ 絲竹の道に長けたる上に手は瀧本の流れを吸みてはしり書うるはしく四  
 書五經の角々々 かど しきはわざとさけて伊勢源氏のなつかしきやまと文明暮文机のほ  
 とりを離さず、さればとて香爐峯の雪に簾をまくの才女めきたる行ひはいさゝかも無  
 く深窓の春深くこもりて針仕事に女性の本分を盡す心懸け誠に殊勝なり  
 き、家に居て孝順なるは出て必らず貞節なりとか、これが所夫と仰がれぬべく定ま  
 りたるは天下の果報の一人じめ前生の功德いか許り積みたるにかと世にも人にも羨  
 まるゝはさしなみの隣町に同商中の老舗と知られし松澤儀右衛門が一人息子に  
 よしのすけ よ 芳之助と呼ぶるゝ優男、契りは深き祖先の縁に引かれて櫛の實の一人子同志、いひ  
 なづけの約成立しはお高がみどりの振分け髪をお煙草盆にゆひ初むる頃なりしとか、  
 さりとては長かりし年月、ことしは芳之助もはや廿歳今一兩年経たる上は公に夫  
 とよび妻と呼ぶるゝ身ぞと想へば嬉しさに胸をどりて友達の鬨ごとも恥かしく、わざと  
 知らず顔つくりながらも潮す紅の我しらず掩ふ袖屏風にいとゞ心のうちあらはれて今

らな 更泣きたる事もあり人みぬひまの手習に松澤たかとかいて見て又塗隠すあどけな  
 さ利發に見えても未通女氣なり同じ心の芳之助も射る矢の如しと口にはいへど待つ歳  
 月はわが爲に弦たゆみしやうに覺えて明かし暮らす程のまどろかしさよ、高殿に見る  
 月の夕影を分つはいつぞとしのび、花の下ふむ露のあした双ぶる翅の胡蝶うらやまし  
 く用事にかこつけて折々の訪おとづれに餘所ながら見る花の面わが物ながら許されぬ一  
 とへがき 重垣にしみ／＼とは物言交すひまもなく兎角うらめしき月日なり隙行く駒に形もあ  
 らば我れ手綱を取り鞭を揚げていそがさばやとまで思ひ渡りぬ、されども天は美人を生ん  
 で美人を恵まず多くは良配を得ざらしむとかいへり、彌生の花は風必ずさそひ十五夜  
 の月雲かゝらぬはまことに稀なり、覺束なしや才子佳人かがなべて待つ歡びの日のいつ  
 か來べき、あし分船のさはり多き世なればこそ親にゆるされ世にゆるされ彼も願ひ此も  
 請ひよしや魔神のうかゞへばとてぬば玉の髪一筋さしはさむべき間も見えぬを若此  
 縁結ばれずとせばそは天災か將た地變か。

## 第二回

隴を得て蜀を望むは夫れ人情の常なるかも、百に至れば千を願ひ千にいたれば又  
 萬をと諸願休む時なければ心常に安からず、つらく思へば無一物ほど氣樂なるは  
 あらざるべし、大抵が五十年と定まつた命の相場黄金を以て狂はせる譯には行かず、  
 花降り樂きこえて紫雲の來迎する曉には代人料にて事調はずとは誰もかねて知れたる  
 はなしつるせんねんかめまんねん人んげんじやうちう常住いつも月夜に米の飯ならんを願ひ假にも無常を觀  
 話鶴千年龜萬年人間常住いつも月夜に米の飯ならんを願ひ假にも無常を觀  
 ずるなかれとは大福長者と成るべき人の肝心肝要かなめ石の固執つて動かぬ  
 所なりとか、そも松澤新田らが祖先と聞えしは神風の伊勢の人にて夙に大江戸に志を  
 たて、糶呉服の見るかげもなかりしが六間間口に黒ぬり土藏時のまに身代たち上りて  
 をとこふたりうちあにむろんいへあととやおと、母方の絶たる姓を興させて新田とは名告らす  
 男の子二人の内兄は無論家の相續弟には母方の絶たる姓を興させて新田とは名告らす  
 れど諸事は別家の格に准じて子々孫々の末迄も同心協力事を處し相隔離すべ  
 からずといふ遺旨かたく奉戴して代々交りをかさね來しが當代の新田のあるじは家に  
 つきて血統ならず一人娘に入夫の身なりしかば相思ふの心も深からず且は利にのみ走る  
 くせもの  
 曲者なればかねては松澤が隆盛をたのみてあやにかけたる許嫁のえにし親なり  
 子なり同舅同士なり不足の品あらば持ち給へと彼方にばかり親切を盡きして引入れし  
 りも少なからず世は塞翁がうまき事して幾歳すぎし朝日のかげ昇るが如き今の榮は皆

まつぎは松澤が庇護なるものから喉元のどもとすぐれば忘るゝ熱あつさ斯く對等たいとうの地位ちゐに至れば目の上めうへの  
 瘤こぶうるさくなりて獨りつく／＼案あんずるやう徑けい十町じゅうちやうを距へだてぬ處ところに同商業どうしやうげふを營いむが  
 上うへに彼かれは本家ほんけとて世よの用もちひも重おもかるべく我われとて信用しんよう薄うすきならねど彼方かなたに七分しちぶの益えきある  
 ときこゝには僅わづかに三分さんぶの利りのみ我が家いへ繁はん榮えい長ちやう久きうの策さくは彼かれ松澤まつぎはの無なきにしかず且か  
 つは娘むすめの容きり色やう世よに勝すぐれたれば是これとても又またひとつの金庫かねぐら芳よし之助のすけ  
 町ちやうの角かく地面ぢめん持ぢ參さんの聲むこもなきにはあらじ一舉いつぎ兩得りやうとくとはこれなんめりと思おもふ心こゝろは娘むすめにも祕ひ  
 め同氣どうき求もとむる番頭ばんとうの勘藏かんざうにのみ割わつて明あかせば横手よこてを拍うつて賛成さんせいし主しゆ從じゆう日夜額にちやうたひ  
 あつめて其方法そのほうを講かうじ居ゐたりき、時ときなる哉かな松澤まつぎははさる歳とし商法しやうはふ上じやうの都合つがふに依より新に  
 田つたより一時いちじ借かり入いれし二千許にせんばかりの金かねことしは既すでに期限きげんながら一兩年いちりやうねん引ひつゞきての不景ふけ  
 氣いきに流石さすがの老舗しにせも手元てもと豊ゆたかならず殊ことに織元おりもとその外ほかにも仕拂しはらふべき金かねいと多おほければ新田につたは  
 親族しんぞくの間あひだ柄がらなり且かつは是迄これまで我が方かたより立たてかへし分ぶんも少すくなからねばよもや事じ情打じやううちあけ  
 て延期えんきを乞こはゞゆるさじと言いひもすまじ他人たにんに内うち兜かぶとを見みすかされ機械きかい仕掛じかけのあやつり  
 身しん上じやう松澤まつぎはももう下くだり坂ざかよと囃はやされんは口惜くちをしく脊せなる新田につたは後あと廻まはし腹はらの織元おりもと其  
 他のほかへ有あり金かね大方おほかた取とりあつめて仕拂しはらひたる噂うはさこそ耳みみよりのことなれと平生ひごろねらひすませし  
 的まの彼方かなたより延期えんきをいひ出ださぬ間まに、切きつて放はなして急催きんさい促そくに言譯いひわけすべき程ほどもなく忽たちまち表おもて

向きの訴訟沙汰とは成れりける素松澤は數代の家柄世の信用も厚ければ僅々千  
 や二千の金何方にても調達は出來得べしと世人の思ふは反對にて玉子の四角まだ萬  
 國博覽會にも陳列の沙汰をきかねど晦日に月の出る世の中十五夜の闇もなくてや  
 は奥は朦朧のいかなる手段ありしか新田が畫策極めて妙にしていさゝかの融通  
 もならず示談を請はゞやと奔走せしかどそれすらも調はずして新田は首尾よく勝を制し  
 凱歌の聲いさましく引揚げしにそれとかはりて松澤が周章狼狽まこと寐耳に出水  
 の騷動おどろくといふ暇もなく巧みに巧みし計略に争ふかひなく敗訴となり家藏  
 のみか數代續きし暖簾までも皆かれが手に歸したれば木より落たる山猿同様のむ木  
 蔭の雨森新七といふ番頭の白鼠去年生國へ歸りし後は十露盤玉と筆先  
 に帳尻つくろふ溝鼠のみなりけん主家一大事の今日も申合せたるやうに  
 富士見西行きめ込み見返るものさへあらざれば無念の涙を手荷物にして名のみ床しき  
 妻戀坂下同朋町といふ處に親子三人雨露を凌ぐばかりの家を借りて辛く膝をば  
 入れたりけり、海ならず山ならぬ人世の行路難今初めて思ひ當り淵瀬ことなる飛鳥川  
 の明日よりは何とせん、もと富家に人となりて柔弱にのみ育ちし身は是れと覺えし藝  
 もなく手に十露盤は取りならへど物に當りし事なければ時の用には立ちもせず坐して喰へ



ば空むなしくなる山高帽子やまたかぼうし半靴はんぐつと明日きのふかざりし身の廻りも一つ賣り二つ賣りはては晦日みそかの  
 勘定かんぢやう定さへ胸むねにつかふる程ほどにもなりぬ。

### 第三回

一人並いちにんなみの男をとこになりながら何なんの腑甲斐ふがひない車夫風情しやぶふぜいにまで落魄おちぶれずとも事外ことほかに仕様の  
 あらうものをと大言吐たいげんきし昔むかしの心の恥はづかしさよ誰たれが好このんで牛馬ぎうばの代かはりに油汗あぶらあせなが  
 し塵埃ちんあいの中馳なかはせ廻めぐるものぞ仕様模様しやうもやうの竭つきはてたればこそ恥はじも外聞ぐわいぶんもなひませにか  
 らめて捨すてた身みのつまり無念むねんも殘念ざんねんも饅頭まんぢう笠がさのうちつに包つみて参まゐりませうと聲低こゑひに勸すすめ  
 る心こゝろいらぬとばかりもぎだうに過すぎ行く人ひとそれはまだしもなりうるさいはと叱しかりつけられ  
 て我知われしらずあとじさりする意氣地いきぢなさままだ霜しもこぼる夜嵐よあらしに辻待つじまちの提燈ちやうちんの火ひの消きえ  
 かへる迄案まであんじらるゝは二親ふたおやのことなり馴なれぬ貧苦ひんくに責せめらるゝと懐くわい舊きうの情じやうのやる方かた  
 なさなさが老體ろうたいの毒どくになりてや涙なみだがちに同おなじやうな煩わづらひ方かたそれも御尤ごもつともなり我われさへ無念むねん  
 はらわたにをきに腸をきの沸をきえ納をきまらぬものを胸むねさける程ほどにも思おぼ召しめすなるべし憎にくきは新田につたなり恨うらめしきは運う  
 平んべいなりよしや血ちをすゝり肉しむらをつくすとも贅あきたるべき奴やつならずと冷凍ひえこほる拳握こぶしぎりつめて當處あてど

もなしに睨にらみもしつ思おもひ返かへせばそれも愚痴ぐちなり恨うらみは人ひとの上うへならず我われに男をとこらしき器きり量やう  
 あらば是これ程ほどまでには窮きゆうしもすまじア、と歎たんずれば吐つく息いきしろく見みえて身みを切きる夜風よかせに破やぶ  
 れ屏風びやうぶの内うち心しん配ばいになりて絞しぼつて歸かへるから車財布ぐるまさいふのもの、少すくなき程ほど苦勞くろうのたかの多おほくな  
 りてまたぐ我家わがやの闕しきあの高たかさ、ア、お歸かへりかと起おきかへ返かへる母はは、お父とつさんは御寢げしなツてゞすかさ  
 ぞごふじう不ござ自由ござで御座ございましたらう何なにもお變かはりは御座ございませんかと裏問うらとこふ心こころは疵きずもつ足あし、オ、  
 お前まへの留守るすに差配さはいどのが見みえられてといひさしてしばた、く瞼まぶたの露白つゆしろ岡鬼平をかきへいといふ有いうめ  
 名の無慈悲むじひもの悪鬼あくきよと羅刹らせつよと蔭口かげぐちするは濫團扇しづつちばの縁えんはなれぬ店子たなごども共えてが得え手勝手てが  
 やちんきれい、はら、ほんくれ、さたうぶくるあま、しる、す、お置おかば下さぐる目尻めじりと諸もろとも共えに眉毛まゆげの  
 家賃やちん奇麗きれに拂はらひて盆暮ぼんくれの砂糖袋さとうぶくろ甘あまき汁じゆさへ吸すはし置おかば下さぐる目尻めじりと諸もろとも共えに眉毛まゆげの  
 名なによぶ地藏ぢぎやう顔がほにも見みゆべけれど、今いまの身みの上うへには憎にくくし剛慾がうよくもの事情じじやうあくまで知し  
 りぬきながら知しらず顔がほの烟草たばこふかく、身みに過あやまりあればこそ疊たぐみに額ひたひ埋うづめて歎たんぐわん願も吹ふ  
 出きだす烟けむりの輪わと消けして、言い譯わけきく耳みみはなし家賃やちんをさめるか店たなを明あけるか道みちは二ふたつぞ何方どちら  
 にでもなされとほんとはたく其煙管そのきせるで打うちわつてやりたい面つらがまち目もくて的てきなしに今日けふまでと  
 日ひを延のべしは重ちゆうく、此方こなたが悪わるけれど母はは上うへとらへて何言居なにひをつたかお耳みみに入れいれまいと思おもへ  
 ばこそ様さま々々の苦勞くろうもするなれさらでもの御病氣ごびやうきにいとゞ重おもさを添そへたやうなもの  
 て困こまつたと言いひはせで低頭うづつく心思案こころもあんにくれぬ、差配さはいどのが見みえられてと母ははは詞ことばを繰くり返かへし

て何か譯は知らねど今直ぐに此家を立て一寸の猶豫もならぬとそれはく畫にもかゝれぬ談じやうお前にも料簡あることゝやうやうに言延べて歸ります迄と頼んでは置いたれどマアどうしたら宜からうか思案して見てくだされと小聲ながらもおろく涙お案じなされますな何うにかなります今夜は大分更けましたから明日早々出向きまして談合ひをつけませうナニ少しの行違ひでそれほどの事では御座いませんと我が親にまでいつはるとはさても後のよ恐ろしく、寢ぬに明くる夜明け鳥もこうと鳴きて反哺の教となるものを生甲斐なや五尺の身に父母の恩荷ひ切れずましてや暖簾の色むかしに染めかへさんはさて置きて朝四暮三のやつくしきにつく／＼浮世いやになりて我身捨てたき折々もあれど病勞れし兩親の寢顔さし覗くごとに我なくば何とし給はん勿體なしと思ひ返せど沸くは涙か薬鍋の下炭火とろくと消え勝の生計とて良醫の手にもかゝられねば見すく重り行く心ぐるしさよ思へば天も地も佛も我爲には皆仇か今この場合を見すぐしにするとは何の事ぞ新田こそ運平こそ大悪人の骨頂なれ娘ばかりはよもやと思へどそれもこれも心の迷ひか姿こそ詞こそやさしけれ瓜の蔓に生らぬ茄子父親と同じ心になつて今の我身に愛想が盡きて、人傳の文一通それすらもよこさぬとは外面如菩薩、内心はあれも如夜叉め。

## 第四回

他人はとまれお前さまばかりは高が心御存じと思ふたは空だのめか情ないお詞お前さま  
 と縁きれて生存へる私と思召すか恨みを申さば其お心が恨みなり父様が悪計それ  
 お責め遊ばすにお答への詞もなければ其くやしきも悲しきもお前さまに劣ることかは人知  
 らぬ夜の家具の襟何故にぬるゝものぞ涙に色のもしあらば此袖ひとつにお疑ひは晴れ  
 やうもの一つ穴の獸とは餘りの仰せつもりても御覽ぜよ繋がれねど身は籠の鳥も同じこと  
 風呂屋に行くも稽古ごとも一人あるきゆるされねば御目にかゝる折もなく文あげたけれど  
 御住所誰に問ひもならず心にばかり泣て泣て居りましたを薄情もの義理しらずと押く  
 るめてのお詞お道理なれど御無理なり此身一つに科があらば打たれもせん突かれもせん膝  
 ともといふ談合相手に遊ばしてよと涙ながら控へる袂を鋭く拂つてお高どの詞ばかりは  
 嬉しけれど眞實やら何やら心まで見る目は芳之助あやにく持たず父御の心も大方は知  
 れてあり甲斐性なしの我れ嫌になりて縁の絶ちどが無さに計略三昧かゝりし我等は畏  
 のうちの獸ぞ手を打て笑はるゝ筈を何の涙お化粧がはげては氣の毒なり牛に乗換へるうま

き話も内々はなし ないくは有ることならんを家藏持參いへくらぢさんの業平男なりひらををとこに見せ給ふ顔我等かほわれらづれに勿體もつたい  
 なしお退のきなされよ見たくもなしとつれなしや後うしろむき憎にくらしき事の限り並べられても口惜くちを  
 しきはそれならず解とけぬ心こころにあらはれぬ胸むねうらめしく君様きみさまこそは何とも思おぼしめ召しめすまじけ  
 れど物ものごゝろ知しる其頃そのころよりさま／＼のこ苦勞くろうにして身みだしなみ物學ものまなび彼れか此れか  
 お氣きに入りたや飽あかれまじと心こころのたけは君様故きみさまゆゑに使つかはれて片時かたとき安やすき思おもひもせずお友ともだ  
 ちあそ遊あそびも芝居しばあゆ行きもお嫌きらひと知しれば大方おほかたは斷ことわりいふて僻物ひがものと笑わらはれしは誰たれの爲ためを  
 さな遊あそびの昔むかしは知しらず睦むつまじき中なかにも恥はづかしさが楯たてに成なりて思おもふこと思おもふまゝにも得えいはざ  
 りしを淺あさき心こころと思おぼしめ召しめすか假令たとひどのやうな事ことあればとて仇あだし人に何なんのその笑わらひ顔がほ見みせて  
 ならうことかは山やまほどの恨うらみも受うくる筋すぢあれば詮せん方かたなし君様きみさまに愛想あいさうつきての計略たくみかと  
 はお詞ことばながら餘あまりなり親おやにつながらるゝ子罪こつみは同じおなじと覺悟かくごながら其名そのなばかりはゆるし給たまへよ  
 しや父様ととさまにどのやうなお憎にくしみあればとて渝かはらぬ心の私こころわたしわたくし君様きみさまの妻つまなるものを何なにと  
 げくしい他人たにんあしらひ聞きこえぬお心こころやといひたさを押おさゆる涙袖なみでに置おきてモシと止とめれば振ふ  
 りはら拂はふ羽織はおりのすそエ、何なにさるゝ邪魔じやまくさし我われはお前まへさまの手遊てあそびならずお伽とぎになるは嬉うれし  
 ならず其方そなたは大家たいけの娘むすめ御暇ごひまもあるべしその日暮ひぐらしの身みは時間じかんもをしく誰たれぞ相手あひてをお探さが  
 しなされと振ふりはらへば又またすがり芳よしさまそれは御眞實ごしんじつかと見上みあぐる面貌おもてらみかへして嘘うそいつ

はりはお前まへさまなどのなさること義理ぎりにんじやう人情にんじやうのある世よならよもやと思おもふ生きしやうぢき正直しやうぢきから飼かひ  
 いぬいぬやうやうとひと犬いぬ同どう様な人ひとでなしに手てをかまれて暖簾のれんに見みる恥はぢは誰たれゆゑぞ原もとを正たゞせば根ね分けの菊きく親子おやこ  
 なかなかの中に知しらぬといふ道理だうりはなしよし知しらぬにせよ知しるにせよそれは其方そなたの御勝手ごかつてなり仇敵かたき  
 ここの子こを妻つまにもせられず嫁よめにもすまじ言いふこともなし聞きくことも無し恨うらみつらみを並ならべ立た  
 なば力ちから車ぐるまに牛うしの汗あせ何なんの積つみみ載のせきれるものかは言いはぬが花はなぞお前まへさまは盛さかりの身み春はるめ  
 き給たまふは今いまの間まなるべし薦こもかぶりながら見送みおくらんと詞ことば叮いねい嚀いに氣き込こみあらく齒はの根ねきりく  
 と喰くひしばかりて釣つり上あぐる眉根まゆねおそろしく散さん髮ぱつな斜なめに拂はらひあげて白しろき面おもに紅べにの色いろさしも  
 優やさしき常つねには似にと止とめれば振ふりきる袖そで袂もとまづ今いましばしと詫わびつ恨うらみつ取とりつく手て先さきうるさし  
 と立たち蹴けにはたと蹴けた倒たふされわつと泣なく聲こゑ我われとわが耳みみに入りて起おき返かへるは何いづこ處ところ、平つね常ねの部へ屋や  
 に倚よりかゝる文机ふづくゑの湖月抄こげつせうこてふの卷まきの果敢はかなく覺さめて又また思おもひそふ一いつ睡すゐの夢ゆめ夕ゆふ日ひか  
 たぶく窓まどの簾風すだかぜにあほれる音おとも淋さびし。

## 第五回

お珍めづらしやお高たかさま今日けふの御入來おいでは如何どういふ風かぜの吹ふきはしか一を昨日とのお稽古けいこにも其前そのまへ

もお顔かほつひにお見みせなさらずお師ししやう匠さまも皆みなさまも大たい抵ていでないお案あんじ日ひがな一日いちにちお  
 噂うはさして居をりましたと嬉うれしげに出迎でむかふ稽古けいこ朋ほう輩ばい錦にしき野のはな子こと呼よばれて醫い學がく士しの妹いも博はく愛あい仁じ  
 慈んじの聞きこえたかき兄あにを見み真ま似ねか温順おとなしづくり何なに某がし學がく校かう通つう學がく生せい中ちゆうに萬ばん綠りよく叢さう中ちゆう一いつ  
 點てんの紅くれないと稱なへられて根ねあがりの高たか鬻まげに被布ひふ扮粧でたちは廿歲はたちを越こしての肩縫かたぬいあげ可愛かほいらしき  
 ひとがら人ひと品しななりお高たかさま御覽ごらんなされ老としより人ひとなき家いえの婿むらちのなさは兄あには兄あにとて男をとこの事こと家内かうちのこととはと  
 んと棄物すてもの私わたし一人ひとりが拍うつも舞まふもほんに埃ほこりだらけで御座ございますと笑わらひて誘いざなふ座蒲團ざぶとんの上うへ  
 おかまひ遊あそばすなと沈しづみ聲こゑにお高たかうやむやの胸むねの關せき所しよたれに打明うちあけん相手あひてもなし朋友ともだち  
 の誰たれ彼かれ睦むつまじきもあれどそれは春はる秋あきの花紅はなもみぢ葉對はつめにして挿さす簪かんざしの造つくりももの  
 座うざの交際つきあひ姿すがたこそはやさしげなれ智慧ちゑ宏くわう大だいと聞きくは此この人ひとすがりて見みばやとこれおもも稚を  
 氣きさりながら姿すがたに知しれぬは人ひとの心笑こゝろひものにされなばそれも恥はづかし何なにとせんと思おもふほど  
 兄あに弟ていある人羨ひあましくなりてお兄あに様さまはおやさしいとかお前まへさま羨うらやましと口くちを洩もれ  
 ば花子はなこ少し笑ゑみを含ふくんでこればかりは私わたしの幸福しあはせさりとて喧嘩けんくわする時ときもあり無理むりな小言こごとい  
 はれまして腹立はらだち合あふこともあれど跡あとも無し先さきもなし海鼠なまこのやうなと笑わらはれます此この頃ころは  
 施療せれうに暇ひまがなうて芝居しばいも寄席よせもとんと御無沙汰ごぶさたその内うちにお誘さそひ申まをします兄あにはお前まへさまをと  
 いひかけて笑わらひ消けす詞何ことばとしらねどお施ほどこしとはお情なさけ深ふかい事ことさぞかし可哀かあいさうのも御座ござ

いませうと思ふことあれば察しも深し花子煙草は嫌ひと聞しが傍の煙管とりあげて一服  
 あわたゞしく押やりつそれはもうさま／＼ツイ二日計前のご極貧の裏屋の者が  
 難産に苦みまして兄の手術に母子とも安全ではありましたれど赤子に着せる物が  
 ないとか聞きませば平常の心に承知がならず其の夜通して針仕事着るもの二つ遣はし  
 ましたと得意顔の物語り徳は陰なるこそよけれとか聞しが怪しのことよと疑ふ胸に相  
 談せばやの心は消えぬ花子さま／＼の患者の話に昨日往診し同朋町とやら若  
 しやと聞けばつゆ違はぬ様子なりそれほどまでにはよもやと思へど正しくならば何とせん  
 實否くはしく聞きたしと思へど咎むる心に詞つまりて應答何やらうろろになりぬお高き  
 ま御ゆるりなされ今兄も戻ります先それよりはお目に懸けたきもの往日お話し申せし  
 兄が祕藏の畫帖イエお前さまに御覽に入るゝに賞められこそすれ何として小言聞くこと  
 ではなしお待遊ばせよと待遇ふり詞滑かの人とて中々に歸しもせず枝に枝そふ物が  
 たり花子いと眞面目になりて斯う申してはをかしけれどお前さまはお一人子私とても兄  
 ばかり女の同胞もちませねば淋しさは同じこと何かにつけて心細し御不足かは知  
 らねど妹と思召してよと底にものある詞遣ひそれは私より願ふことゝいふ詞聞きも  
 畢らずそれならばお話ありお聴き下さりますかと怪しの根問ひお高さまお前さまのお胸一



つ伺へば譯のすむ事外でもなし實の姉さまにおなり下さらぬかと決然いはれて御串戯  
 私こそ實の妹と思召してと言ふを遮りそれでは未だ御存じの無きならん父御さまと兄と  
 の中にお話し成立つてお前さまさへ御承知ならば明日にも眞實の姉様お厭か〜お厭  
 ならばお厭でよしと薄氣味わろき優しげの聲嘘か實か餘りといへば餘りのこと、亂るゝ心  
 を流石に静めて花子さま仰せまだ私には呑込ませぬお答へも何も追てのこと今日は先づ  
 お暇と立たんとするを強ても止めず然らばお歸りか好きお返事お待申しますと送り出す玄  
 關先左様ならばを跡になして乗り出す車の掛聲に走り退く一人の男あれは何方の藥  
 取 憐れの姿やと見返れば彼方よりも見返る顔才、芳さま詞の未だ轉び出でぬ間に車は  
 輾輾として轍のあと遠く地に印されぬ。

## 第六回

中硝子の障子ごしに中庭の松の姿をかしと見し絹布の四布蒲團すつぽりと炬燵の  
 内あたゝかに、美人の酌の舌鼓うつゝなく、門を走る樽ひろひあれは何處の小僧どん  
 雪 中の一つ景物おもしろし、とても積らば五尺六尺雨戸明けられぬ程に降ら

して常闇の長夜の宴、張りて見たしと纏れ舌に謔言の給ふちろく目にも六花の  
 眺望に別は無けれど、身にしむ寒さは降かゝりての後ならで知れぬ事なり、うそ寒しと云  
 ひしも二日三日朝來もよほす薄墨色の空模様は頭痛もちの天氣豫報相違なく西北  
 の風ゆふ暮かけて鷺毛か柳絮かはやちらくくと降り出でぬ、入相の鐘の聲陰に響きて  
 甍にいそぐ友、烏今宵の宿りの佐しげなるに誰が空せみの夢の見初め、待合の奥二一  
 階の爪弾きの三下り簾を洩るゝ笑ひ聲低く聞えて思はず停る行人の足元、狂ふ煩  
 悩の犬の尻尾、しまつたりと飛び退きて畜生めとはまこと踏みつけの詞なり、我が  
 物なれば重からぬ傘の白ゆき往來も多きはあらぬ片側町の薄ぐらきに悄然とせし  
 提燈の影かぜに瞬くも心細げなる一輛の車あり、齒代の安さ顯はれて剥けた  
 る塗り破れし母衣、夜目なればこそ未だしもなれ晝はづかしき古毛布に乗客の品も嘸ぞ  
 と知られて多くは取れぬ瘦せ田作り米の代ほど有りや無しや九尺二間の煙の綱あはれ手  
 中にかゝる此人腕力おぼつかなき細作りに車夫めかぬ人柄華奢といふて賞め  
 もせられぬ力役社會に生ひ立つた身とは請取れず履歴は如何に聞きたしと問ふ人な  
 ければ我れと唇開きもならず、アゝと出る溜息を嚙しめる齒の根寒さにふるひて打仰  
 ぐ面を見れば扱も美男子色こそは黒みたれ眉目やさしく口元柔和に歳は漸く二十か一

か繼々つぎつぎの筒袖ついでぎもの着物いとおり糸織いとぞろへに改あらためて帶おびに卷まく金鎖きんぐさりきらびやかなりの姿なりさせて見みた  
 し流行りゆうかうの花形はながたやくしやなん俳優はいゆう何なんとして及およびもないこと大家たいけの若旦那わかだんなそれ至當したうの役やくなるべし、  
 さりとては是れ程こほの人品じんぴを備へながら身みに覺おぼえた藝げいは無なきか取とり上げて用もちひる人は無なきか憐あはれ  
 のことやとは目めの前まへの感かんじなり心しんじやう情じやうさらさら知しれたものならず美うつくしき花はなに刺とげもあり  
 柔和にゆうわの面おもてに案外あんぐわいの所しよゐ爲なきにもあらし恐おそろしと思おもへばそんなもの、鼻負ひいきめ目めには雪せつち  
 中ちゆうの梅春うめはる待まつまの身過みすぎ世過よすぎ小節せうせつに關かはらぬが大勇だいゆうなり辻待つじまちの暇いとまに原書げんしよも緋ひ  
 て居ゐさうなものと色眼鏡いろめがねかけて見みる世せじやう上もつの物映ものうつるは自己おのれが眼鏡めがねがらなり、夜よはまだ更ふ  
 けねど降ふりしきる雪ゆきに人足ひとあし大方おほかた絶たえ々々になりて戸とを下おろす商家しやうかこゝかしこ遠とほく引ひく按あ  
 摩んまの聲こゑに近ちかく交まじる犬いぬの子この叫さけびそれすらも淋さびしきを路みち傍ばたの柳やなぎにさつと吹ふく風かぜになよ／＼  
 と靡なびいて散ちるは粉雪こゆき、物思ものおもひ顔がほの若者わかものが襟えりのあたり冷ひやりとしてハツと振拂ふりはらへば  
 半面はんめんを射ある瓦斯燈がすとうの光蒼ひかりあを白しろし、行ゆくく人はなし乗のりる人は猶なほ更さらなからんを何なにを待まつとか  
 馬鹿ばからしさよと他目たごめには見みゆるるものからまだ立去たちさりもせず前後ぜんごに目めを配くまるは人待ひとまつ心の  
 絶たえぬなるべし、凍こほる手先てさきを提燈ちやうちんの火ひに暖あためてホツと一息ひといき力ちからなく四邊あたりを見廻みまはし又一またひ  
 息いき此處こゝに車くるまを下おろしてより三度目さんどめに聞きく時の鐘かね、今いまはと決けつ心の臍ほそがた固かたまりけんツト立上たちあ  
 りしが又懷またふとこ中に手てをさし入いれて一思案ひとしあんア、困こまつたと我知われしらず歎息たんそくの詞唇ことばくはをもれて其そ

のまゝ 儘に身はもとの通り舌打の音續けて聞えぬ、雪はいよ／＼降り積るとも歇むべき氣色  
 少しも見えず往來は到底なきことかと落膽の耳に嬉しや足音辱しと顧みれば角燈の  
 光り雪に映じ巡回の查公怪しげに目を注いで行き過ぎられし後に又人音この度こそ  
 はと見れば情なし三軒許手前なる家に入りぬ、流石に氣根も竭果てけん茫然として  
 立つくす折しも最少し參ると御座いませうと話し聲して黒き影目に映りぬ、天の與へ人こ  
 そ來つれ外すまじと勇み立て進み寄ればはて何とせん、過たるは及ばざる二人連とは生  
 憎や、車は一人乗りなるを。

## 第七回

心苛られのさるゝものは散會過ぎて來ぬ迎ひの車と數へ入れたし、待たせて置きて  
 も宜かりしを供待ちの雜沓遠慮して時間早めに吩咐せしもの何としての相違  
 ぞやよもや忘れて來ぬにはあらじ家にても其通り何時まで迎ひ出さずには置かれまじ、  
 例の酒癖何處の店にか酔ひ倒れて寢入りても仕舞しものかそれなればいよいよ困りしこ  
 となり家にても嘸お案じ此家へも亦氣の毒なり何とせんと思ふ程より積る雪いとゞ心

細く燭しよくろゐ 涙なみだ ながるゝ表二階おもゑかい に一人取殘ひとり されし新田にった のお高たか、げにも浮世うきよ か音おんぎ 曲よく の  
 師匠ししやう の許もと に然しか るべき會くわい の催もよほ し斷ことわ りいはれぬ筋すぢ ならねどつらきものは義理ぎり の柵しがら 是非ひ と待ま た  
 れて此日このひ の午後ひるすぎ より、飾かざ り錦にしき の裏うら はと問と はゞ涙なみだ ばかりぞ薄うすげ 化粧しやう に深ふか き苦勞くらう の色いろ を隠かく し  
とも 友とも が無邪氣むじやき の物ものがた 語わら りを笑わら ふて聞き く胸むな ぐるしき思おも ひに瘦やせ し手首たなくび に取りと すがりてお羨うらや ま  
 しやお高たか さまのお手て の細ほそ さよお酢す めし上あが りしか御傳ごでん 授聞じゆき きたしと眞面目まじめ に問と ふ人可ひとを 笑か し  
 くはなくて其心そのこゝろ 根羨ねらや ましくなりぬ其そ の人ひと 々／＼ 歸かへ り果は てゝより一いち 時じかん 間かん 許ゆる 待まち つには長なが  
 き時間じかん ながら車くるま の音門おと にも聞きこ えず捨置すてお かねば未ま だしもなれどお茶ちやま 參まゐ らせよお菓子くわし あがれ  
 夜よ はまだそれほど深ふか くもなしお迎むか ひも今いま 參まゐ らん御ご ゆるりなされと好遇もてな さるゝ程ほど 猶なほ 更さら 氣き の  
 毒どく さ堪がた へ難がた くなりて何時いつ まで待まち ちても果は て見み えませねば憚はづか りながら車くるま 一つ願ねが ひたしと婢はした  
 女め に周旋しうせん のほど頼たの み入れればそれは何なん の造作ぞうさく もなきことなれどつひ行き違ちが ひにお迎むか ひの  
 參まゐ るまじとも申まを されず今いま 少すこ しお待まち なされてはと濫しづ 々／＼ にいふは車くるま もとめにゆく がつらさ  
 になるべし、それも道理だうり 雪ゆき の夜道よみち 押お してとは言い ひかねて心こゝろ ならねど又また 暫しばらく 時じ 二度目にどめ に入い れ  
 し茶ちや の香か り薄うす らぐ頃ころ になりても音おと もなければ今いま は來こ ぬものか來く るものか當あ てにもならず當あ  
 てにして何時いつ といふ際さいげん 限げん もなし行き違ちが ひになるともそれはよし兎と に角車かくるま 願ねが ひたしと押おし か  
 へして頼たの み入い るゝに師匠ししやう 實じつ にもと氣き の毒どく がりて然さ らばお止と め申まを すまじとてもお歸かへ りなさるゝ

に夜が更けてはよろしからず車大急ぎに申して來よと主の命令には詮方なくてや恨  
 めしげながら承はりて梯子あわたゞしく馳せ下りしが水口を出づる大黒傘の上に雪つ  
 もるといふ間もなきばかり速かに立歸りて出入の車宿名残なく出拂ひて挽子一人も  
 居ませねばお氣の毒さまながらと女房が口上其まゝの返り事に然らば何とせんお  
 宅にお案じはあるまじきに明早朝の御歸館となされよなど親切に止められるれど  
 左様もならず、雪こそふれ夜はまだそれほどに御座りませねばと歸り支度とゝのへるにそ  
 れならば誰ぞ供にお連なされお歩行御迷惑ながら此邊には車鳥渡むづかしからん  
 大通り近くまで御難澁なるべし家内にてすら火桶少しも放されぬに夜氣に當つてお風  
 めすな失禮も何もなしこゝより直にお頭巾召せ誰れぞお肩掛お着せ申せと總掛りに  
 支度手傳はれて憚りさまといひも敢ず更けぬ内にお急ぎなされなまなかお止め申さず是  
 れ程に積るまいものお氣の毒のこといたしたりお詫はいづれと送り出す門口犬の子の聲  
 恐ろしけれど送りの女中が骨たくましきに心強くて軒下傳ひ三町ばかり御  
 覽なされませあの提灯は屹度車今少しの御辛防と引く手も引かるゝ手も氷りつく  
 やうなり嬉しやと近づいて見ればさても破れ車モシと聲はかけしが後退さりする送りの女  
 中 ソツとお高の袖引きてもう少し參りませうあまりといへばと跡は小聲なり折しも降

しきる雪にお高洋傘を傾けて見返るともなく見返る途端目に映るは何物蓬頭亂面  
 の青年車夫なりお高夜風の身にしみてかぶるくと震へて立止りつゝ此雪にては先  
 へ行きても有るか無きか知れませねば何にてもよし此の車お頼みなされてよと俄に足元  
 重げになりぬあの此様な車にお乗しなさるとかあの此様な車にと二度三度お高軽く點頭き  
 て詞なし我れも雪中の隨行難儀の折とて求むるまゝに言附くる那の車さりとは不  
 似合なり錦の上着につゞれの袴つぎ合したやうなと心をかしく挽出すを見送つて御機嫌  
 よう車夫さんよくお氣をつけ申して。

## 第八回

馳せ出す車一散、さりながら降り積る雪車輪にねばりてか車上の動揺する割  
 に合せて道のはかは行かず萬世橋に來し頃には鐵道馬車の喇叭の聲はやく絶えて京  
 屋が時計の十時を報ずる響空に高し、萬世橋へ參りましたがお宅は何方と軾を控へて  
 佇む車夫、車上の人は聲ひくゝ鍋町までと只一言、車夫は聞きも敢へず力を籠  
 めて今一勢と挽き出しぬ、皚々たる雪夜の景に異りはなけれど大通りは流石に人

足した足ええず雪ゆきに照てり合あふ瓦斯燈がすとの光ひかり皎々かうくとして、肌はだをさす寒氣かんきの堪たへがたければにや、  
 車しやじやう上ひとの人は肩かた掛かけ深く引ひきあげて人目ひとめに見みゆるは頭巾づきんの色いろと肩かた掛かけの派手はでも模様まようのみ、車  
 は如法によほふの破やれ車ぐるまなり母衣ほろは雪ゆきを防ふせぐに足たらねば、洋傘かうもりに辛からく前ぜん面めんを掩おほひて行くこと  
 幾いくちやう町なべちやう、鍋なべちやう町うらは裏はうの方ほうで御座ございますかと見返みかへれば否いな鍋なべちやう町うらではなし、本ほん銀しろかねち  
 町やうなりといふ、然さらばとばかり馳はせ出いだまたいつちやう、曲まがりませうかと問とへば、眞直まつすぐに  
 と答こたへて此處こゝにも車くるまを止とめんとはせず日本橋にほんばし迄まで行いきたしといふに何なにかは知しらねど詞ことばの通  
 り、河岸かしにつきて曲まがりてくれよ、とは何いつ方かた右みぎか左ひだりか、左ひだりへいや右みぎの方かたへと又一また横よこ町ちやう、  
 お氣きの毒どくなれど此處こゝを折をれて眞直まつすぐに行ゆきて欲ほし、と小路こみちに入いりぬ、何なんの事ことぞ此路このみちは突  
 當たり、外ほかに曲まがらん路みちも見みえねば、モシお宅たくはどの邊へんでと覺おぼ束つかなげに問とんとする時とき、何  
 とせん道みちを間違まちがへたり引返ひきかへしてと復跡またあと戻もどり、大路おほぢに出いれば小路こうぢに入いらせ小路こうぢを縫ぬては  
 大路おほぢに出いて走そう幾いく走そう、轉てん幾いく轉てん、蹴けた立たる雪ゆきに轍わだちのあと長ながく引ひきてめぐり出いれば又また以前いぜんの道みち  
 り、薄うす暗くらき町まちの片角かたかどに車夫かたかどは茫ぼう然ぜんと車くるまを控ひかへて、仰おほせとほ、まゐり参まゐりましたら又また以前いぜんの  
 道みちに出いましたが若もしやお間違まちがひでは御座ございますまいか此角これを曲まがると先程さきほどの糸屋いとやの前ま眞  
 直ちやうめいに行ゆけば大通りへ出いて仕舞しまひますたしか裏うら通とほりと仰おほせで御座ございましたが町名  
 は何なんと申まをしますか夫次第それしだい大抵たいていは分わかりませうと問掛とひかけたり、車しやじやう上ひとの人は言葉ことば少すくなと  
 兔と



に角曲かどまがつて見て下くだされ、たしか此道このみちと思ふやうなりとて梶棒かぢぼうを向きかへさせぬ、御覽ごらん  
 なされまし矢張りこゝは元の道もとみちこれで宜よろしう御座ごぞいますかと訝いぶかしみて問ふ車夫しやふの言葉ことばに、  
 ほんにこれは違ちがひたりもう一つ跡あとの横町よこちやうがそれなりしかも知れずと曖昧あいまいの答こたへ方かた  
 さればといふて挽ひき返かへす一横町ひとよこちやうこゝにもあらず今少いまこし先さきへといふ提燈ちやうちん揺ゆり消けして  
 商家しやうかに火ひを借かりしも二度三度車夫にどさんとしやふまなち亦道くはに委くはしからずやあらん未だ此職このしよくに馴なれざるに  
 やあらん同じ道行おなじみちゆきかへ返りて困かう果はてもしたらんに強つよくいひても辭じしもせず示しめすが儘まの道みちを  
 取りぬ、夜よは漸やうく々に深ふかくならんとす人影ひとかげちらほらと稀まれになるを雪ゆきはこゝ一段いちだんと勢いきほひ  
 まして降ふりに降ふれど隠かくれぬものは鍋焼なべやき餛飩うどんの細ほそく哀あはれなる聲戸こゑとを下おろす商家しやうかの荒あく高たかき  
 音おと、さては按摩あんまの笛ふえいぬ犬こゑの聲こゑ小路こうぢ一つ隔へだて、遠とほく聞きこゆるが猶なほ更さらに淋さびし、さても怪あやしや車しやじ  
 上やうの人ひと萬世よろづよ橋はしにもあらず鍋町なべちやうにもあらず本銀町ほんしろかねちやうも過すぎたり日本橋にほんばしにも止とど  
 まらず大路おほちこうぢ小路いくとほ幾いづかた通りそも何方いづかたに行かんとするにか洋行やうかうして歸朝きてうののち妻つまを忘わするゝ  
 人ありとか聞ききしがこれは又またいかに歸かへるべき家いへを忘わすれたるか歳ととしもまだ若わかかるを笑止せうしといはゞ  
 笑止思せうしおもへば扱さていぶかこと、今度こたひは京橋きやうばしへと急いそがせぬ、裏道うらみち傳つたひ二町三町にちやうさんちやう  
 町名ちやうめいは何なにと知しれねど少すこし引ひき入りし二階建にかいだてに掛行燈かけあんどんの光ひかり朧ろうく々として主ぬしはあり  
 やなしや入口いりぐちに並ならべし下駄げた二三足料理番にさんぞくれうりばんが欠伸あくび催もよすべき見世みせがりの割烹店かつぼうてんあり、

車しやじやう上ひとの人は目め早く認みとめて、才こゝ、此處こゝなり此處こゝへ一寸ちよつとにはかかさしづいっせいいき  
 れる車門くるまどぐち口おに下おろす梶棒かぢぼうと共ともにホツト一息ひといきうち内ちには女をんな共ともが口くち々々に入いらつしや  
 います。

## 第九回

勢いきほひよく引ひき入れしが客きやくを下おろして扱さておもへば恥はづかし、記憶きおくに存のこる店みせがまへ今いまの我わが身み  
 には往昔むかしながら世よの人は未まだ昨日きのふといふ去きよ年ねん一をと、し同どう商しやう中ちゆうの組くみあひ合ひくわい會ぎあるひ議ぎ或あるひは  
 何なにがし某こんしんの懇親くんしん會くわいに登のぼりなれし梯子はしごなり、それと知しれば俄にはかに肩かたすかぼめられて見みる人ひとなけ  
 れば遽あはたしく片蔭かたかげのある薄暗うすくらがりに車くるまも我われも寄よせて憩いこひつ、静しづかに顧かへりみれば是これも笹原ささはら  
 走はしるたぐひ、誰たがが目めに覺おほえて知しるものぞ松澤まつざはの若わか大將たいしやうと稱たへられて席せきを上かみ座くらに設まう  
 けられし身みが我われすらみすぼらしき此服このなり装よしや面おもてに覺おほえが有あればとて他人たにんの空そら肖に、それ  
 もあるならひなり況ましてや替かはりたる雪ゆきと墨すみおろかなこと雲くもと泥つちほど懸けん隔かくのおびたゞしさ  
 如何いかに有う爲あ轉變てんべんの世よとはいへ是これほどの相違さうゐた誰なんれが何なんとして氣きのつくべき心こゝろの鬼おにに見み知り  
 越こしの人目ひとめ厭いとはしく態わざと横よこ町ちやうに道みちを避さけて見みられじとする氣きあつかひも他人たにんは何なんの感かん

じもなく摺れ違つて見合はす眼の電光、ハツと思ふは我ればかり、態とつくるかまこと  
 見忘れてか知らず顔に過ぎ行かれて、撫で下ろす胸にむらくと感ずるはさても人情  
 こそ薄きものなれ紙といはゞ吉の紙見えすいたやうな世の中なり、知り顔して欲しきにも  
 あらず詞かけられては身の置場もなければそれにも何か色のあるもの、物いはゞ振切らん  
 ず袖がまへ嘲るやうな尻目遣ひ口惜しと見るも心の癖みか召使ひの者出入のもの指折  
 れば少からぬ人数ながら誰れ一人として我れ相談の相手にと名告出づるものなし、富貴  
 には寄る親類顔幾代先きの誰様に何の縁故ありとかなしと猫の子の貰ひ主までが  
 實家あしらひのえせ追従、槌で掃く庭石の周旋を手はじめに引き入れる工夫算段  
 はじいて見ねば知れぬものゝ割りにも合はぬ品いくら冠せて上穂は自己が内懐中ぬくゝ  
 くとせし絹布ぞろひは誰れ故に着し物とも思はずお庇護に建ちましたと空拜みせし新築  
 の二階造り其の詞は三年先の阿房鳥か、今の零落を高見に見下して全體意氣地  
 が無さすぎると言ひしとか酷と思ふは心がらなり、他人が聞けば適當の評といはれやせ  
 ん別家も同じき新田にまで計らるゝ程の油斷のありしは家の運の傾く時かさるにても憎き  
 は新田の娘なり、うつくしき顔に似合ぬは心小學校通ひに紫袱紗對にせし頃年  
 上の生徒に喧嘩まけて無念の拳を我れ握る時同じやうに涙を目に持ちて、口惜しげに相

ひてにら  
 手を睨みしこともありしがそれは無心の昔なり我れ性來の虚弱とて假初の風邪  
とをかはつかにつた にも十日廿日新田の訪問懈れば彼處にも亦一人の病人心配に食事も進まず稽古  
はうもあこた ごとに行きもせぬとか、お前さまお一人のお煩ひはお兩人のお惱みと婢女共に笑はれて  
うれ 嬉しと聞きしが今更おもへば故らに言はせしか知れたものならず此頃見しは錦野の  
けんくわんさき 玄關先うつくしく粧ふた身に比べて見て我れより詞は掛けられねど無言に行過ぎると  
ふらち は不埒ならずや身こそ零落たれ許嫁の縁きれしならずまこと其心なら美しく立  
つば 派に切れてやりたし切れるといへば貧乏世帯のカンテラの油、今宵の用ひだけありし  
いか か如何に、さらでも御不自由のお兩親が燈火なくば嘸お困り早く歸りて様子知りたきも  
いま の、今の客人の氣の長さまだ車代くれんともせず何時まで待たする心にやさりとて  
はた まさかに促りもされまじ何としたものぞとさし覗く奥の方廊下を歩む足音にも面赫と熱  
われし くなりて我知らず又蔭に入る、思へば待たるゝやうな待たれぬやうな萬一車代を渡す  
かほ 人知りし顔の女中ならば何とせん詞がけられなば何といはん恥の上塗りは要なきこと  
しやだい なり車代といふも知れたもの受けずともよし此まゝに歸らんか否是れ欲しければこそ雪  
よ の夜を二時三時恥も外聞も親には換へられたものならず、はて誰れでも出て來よ此  
のすがた 姿に何として見覚えがあるものかと自問自答折しも樓婢のかなきり聲に、池の端から

来た車夫さんはお前さんですか。

## 第十回

それは何ぞのお間違ひなるべし私お客様にお懇親はなし池の端よりお供せしに相違は無けれど車代賜るより外に御用ありとは覺えず其譯仰せられて車代の頂戴お願ひ下されたしと一步も動かんとせぬ芳之助を誘ふ樓婢は笑みを含み、お間違ひやら何やら私等の知る事ならねど只お客さまの仰せには今の車夫に用事がある足を洗はせて此室へ呼びたしと仰せられたに相違はなし兎に角お上りなされよと洗足の湯まで汲んでくるゝはよも串戯にはあらざるべし偽りならずとせば眞以て奇怪、何人が何用ありて逢ひたしといふにや親戚朋友の間柄にてさへ面背ける我に對して一面の識なく一語の交はりなき然かも婦人が所用とは何事逢たしとは何故人違ひと思へば譯もなければ彼處といひ此處といひ乗り廻りし方角の不審しきそれすら事の不思議なるに頼みたきことあり足を洗ひて上りくれよとは扱も意外わからぬといへば是れ程わからぬ話はなし何とせば宜からんかと佇立たるまゝ躊躇へば樓婢はもどかしげに急がしたて、

お客さまも嘸お待ちかねお逢にならば譯はどの道知れる筈なり先づお出なされよと手をと  
 らへて引立つるに然らば參るべしお手お放しなされ大方は人違ひと思へどお目にかゝ  
 りし上ならではお疑ひ晴れ難からん御案内お頼み申すと明瞭に答へながら心の裡は依  
 然濛々 漠々、靜かに足を淨め了りていざとばかりに誘はれぬ、流石なり商賣  
 がら燦として家内を照らす電燈の光りに襪襪の針の目いちじるく見えて時は今極寒の  
 夜ともいはず背に汗の流るぞ苦しき、お客さまはお二階なりといふ伴はるゝ梯子の一段  
 又一段浮世の憂きといふ事知らで昇り降りせしこともありし其時の酌取り女我が前  
 離れず喋々しく歎待したるが彼の女もし居らば彌々面目なき限りなり其頃の朋友  
 今も遊びに來んは定の物何ぞのはしに我がこと引き出して斯々云々々々とも物語り  
 なば何處まで知らるゝ恥ならんと思へば何故に登樓たるか今更に詮なき事してけりと  
 思ふほど胸さわがれて足ふるひぬ、案内はかねて知る梯子を登り果てゝ右手の小座敷、  
 お客さまは此處にと示したるまゝ樓婢は急ぎ下り行きたり障子の外に暫時たゆたひしが  
 果つべきことならずと身を低くして靜かに明くる座敷の内これは如何に頭巾に見えざりし  
 おもたかけ  
 面肩掛につゝみし身今ぞ明らかに現はれぬ、寤寐にも離れず起居にも忘れぬ我が後來  
 の半身二世の妻新田が娘のお高なり、芳之助はそれと見るより何思ひけん前後無

差別、踵を回してツト馳出づればお高走り寄つて無言に引止むる帶の端振拂へば取すがり突き放せば纏ひつき芳さまお腹だちは御尤もなれども暫時、お長うとは申しませぬましあげたきこと一通りと詞きれ／＼に涙漲りて引止むる腕ほそけれど懸命の心は蜘蛛の圍の千筋百筋力なき力拂ひかねて五尺の身なよくとなれど態と荒々しく突き退けてお人違ひならん其様な仰せ承はる私にはあらず池の端よりお供せし車夫の耳には何のことやら理由すこしも分りませぬ車代賜はる外御用はなき筈御申戲はお措き下されと言ひ拂つてすつくと立てば、あんまりなり芳さま其お心ならそれでよし私にも覺悟ありと涙を拂つてきつとなるお高、才、おもしろし覺悟とは何の覺悟許嫁の約束解いて欲し、とのお望みかそれは此方よりも願ふ事なり何の迂りくどい申上ぐるこの候の一通りも二通りも入ることならず後とはいはず目の前にて切れて遣るべし切れて遣らん他人になるは造作もなしと嘲笑ふ胸の内に沸くは何物、お高涙の顔恨めしげに、お情なしまだ其様なこと自由にならば此胸の中斷ち割つて御覽に入れたし。

## 第十一回

またあ 又逢ふ場所は某の辻某の處に待給へ必らずよと契りて別れし其夜のこと誰れ知るべき  
 ならねば 心 安けれど 心 安からぬは松澤が今の境 涯あらましは察しても居た  
 ものゝそれ程までとは思ひも寄らざりしが其御難儀も誰がせし業ならず勿躰なけれど我  
 が親うらみなり聞かれぬまでも諫めて見んか否父はともあれ勘藏といふものある以上  
 なまなかの事言出して疑ひの種になるまじとも言ひ難しお爲にならぬばかりかは彼のひと  
 の逢瀬のはしあやなく絶もせば何かせん然るべき途のなからずやと惑ふは心つゝむ色目に  
 何ごと顯はれねど出嫌ひと聞えしお高昨日は池の端の師匠のもとへ今日は駿河臺の  
 錦野へと駒下駄直さする日の多かるを不審といはゞ不審もたつべきながら子故にくらき  
 は親の眼鏡運平が邪智ふかき心にも娘は何時も無邪氣の子供伸びしは脊丈ばかりと思ふ  
 か若しやの掛念少しもなくハテ中の好かりしは昔のことなり今の芳之助に何として愛想  
 の盡ぬものがあらうか娘はまして孝心ふかし親の命令ること背く筈なし心配無用と  
 勘藏が注意をさへ取りあげもせず錦野が懇望恰もよし彼れは有徳の醫師なりとい  
 ふ故郷某の地には少からぬ地所をさへ持てりと聞くに娘の爲にも我が爲にも行末わろ  
 き縁組ならずとよりくの相談も洩れきく身の腹だゝしき縦令身分は昔の通りならず  
 とも現在ゆるせし良人ある身に忌はしき嫁入沙汰きくも厭なり表にかざる仁者顔は



ひつぎやう なにごと  
 畢 竟 何 事 か の 手 段 か も 知 れ た こ と なら ず 優 し げ な 妹 御 も 當 て に なら ぬ よ し 折  
 々 見 た こ と も あり 毒 蛇 の や う な 人 々 信 用 な さ る お 心 に は 何 ごと 申 す と も 甲 斐 は  
 ある ま じ さ り と て 此 儘 に 日 を 送 ら ば 悲 し き こ と の 來 ん は 目 の 前 な り 聞 か せ て 心 配 さ す  
 る も 憂 け れ ば 頼 む は 彼 の 人 の 力 の み 男 の 智 慧 に は 良 き 考 へ も な か ら ず や と 思 ひ た て ば 心 は  
 や 竹 、 は や る ほ ど 猶 落 附 て お 友 達 の 誰 さ ま 御 病 氣 と き く 格 別 に 中 の 好 き 人 で は あ  
 り 是 非 お 見 舞 申 し た く 存 じ ま す が と 許 容 を 請 へ ば 平 常 の 氣 だ て に 有 る べ き 願 ひ と て 疑 ひ も  
 な く 運 平 點 頭 き て 然 ら ば 疾 く 行 き て 疾 く か へ れ 病 人 の 處 に 長 居 は せ ぬ も の 供 に は 鍋  
 な り と 連 れ て 行 き な さ れ と 氣 を つ く れ ば イ エ そ れ に は 及 び ま せ ぬ 裏 通 り を 行 け ば つ い 其  
 處 な り 鍋 も 家 の こ と が 忙 し う 御 座 い ま す ツ イ 行 て ツ イ 歸 る に 供 な ど 大 層 す ぎ ま す 支  
 度 も 何 も 入 り ま せ ぬ 、 此 儘 す ぐ に と そ こ 身 仕 度 し て 庭 口 出 で ん と す る 途 端 嬢 さ ま  
 今日 も お 出 かけ か 何 處 へ ぞ と 勘 藏 が ぎ ろ ぐ 目 恐 ろ し け れ ど 臆 し て な る ま じ と 態 と つ く  
 る 笑 顔 愛 ら し く 今日 も と は 勘 藏 酷 い ぞ や 今日 は と 言 は ね ば て に を は が 違 ふ 所 ぞ と ほ 笑  
 み て 何 氣 も な し に 家 を 出 で ぬ 約 束 の 辻 往 つ 返 り つ 待 て ど も ま て ど も 今日 は い か に し けん  
 影 も 見 え ず 誰 れ に 聞 か ん も う し ろ め た し 何 と せん 必 ず 訪 ひ 給 ふ な 我 家 知 ら れ ん は 恥 か し と  
 て 丁 所 つ げ 給 は ね ど 曩 に 錦 野 に て そ れ と な く 聞 き し は う ろ 覺 え な が ら 覺 え あり 縦 し

お怒りにふれ、ばそれまで、空しく物をおもふよりは寧お目にかゝりしうへにて兎も角も  
 せんと心に答へて妻戀下とばかり當所なしにこゝの裏屋かしこの裏屋さりとは雲掴む  
 やうな尋ねものも思ふ心がしるべにや松澤といふか何か知らねど老人の病人二人  
 ありて年若き車夫の家ならば此裏の突當りから三軒目溝板の外れし所がそれな  
 りとまで教へられぬ時は夕暮の薄くらきに迷ふ心もかき暮されて何と言入れん戸のすき  
 間よりさし覗く家内のいたましさよ頭巾肩掛に身はつゝめど目をもるものは紅の涙。

## 第十二回

さらでも老ては僻むものとか況んや貧にやつれ苦にやつれ人恨めしく世の中つらく明け  
 ては歎き暮れては怒り心晴間なければさまでは無き病氣ながら何時癒るべき景色もな  
 くあはれ枯木に似たる儀右衛門夫婦待ちわびしきは春ならで芳之助の歸宅の遅さよ好き  
 客ありて遠くまで行きたるにやそれにしても最う歸りさうなもの日没まへに一度づゝ様子  
 見に戻るが常なるを何として今日はと頸を延ばす心は同じ表のお高も路次口顧みつ家内を  
 覗きつ芳さまはどうでもお留守らしく御相談すること山ほどあるをお目に懸らでは戻ら

る、ことかはさるにても 此病人のうへに此お生計右も左もお身一つに降りかゝる芳さ  
 まが御心配は嘸なるべし尋常ならば御兩親の見取り看護もすべき身が餘所に見聞  
 苦しきよと沸き返る涙胸に呑みて差のぞかんとする二枚戸を内より明けて面を出すは見違  
 へねども昔は残らぬ芳之助の母が姿なり待つ人ならで待たぬ人の思ひも寄らず佇むか  
 に驚かされて物をいはず見つむる目元も疎くなりてや不審げに誰何さまぞと問はるゝもつ  
 らしお高頭巾を手早く取りてお忘れ遊ばしたかと取すがりて啼く音に知るゝ焼野の雉子我  
 子ならねど繋がる縁とて母は女の心も弱く才ゝお高か否お高どのか何として此様な處へ何  
 う尋ねて知れましたとおろゝ涙の聲きゝ附けてや膝行出づる儀右衛門はくぼみし眼にキ  
 ツと睨みてコレ何を云つて居るぞ夕方方は別して風が寒し其うへに風でも引かば芳之助  
 に對しても濟むまいぞやといふ詞の尾に附いてお高おそるゝ顔をあげ御病氣といふこ  
 とを人傳に聞きましてお怒りにふれるとは知るも御様子が伺ひたさに出にくい所を繕つ  
 て漸うの思ひで参りましたお父様にもお執成をとしほゝとして言出づるを取次ぐ母が  
 詞も待たず儀右衛門冷笑つて聞かんとせざりとは口賢くさま／＼の事がいへ  
 たものかな父親に薰陶れては其筈の事ながらも其手に乗りはせぬぞよ餘計な口に風  
 引かさんより早く歸宅くさるゝが宜さゝうなもの誠と思ひて聞くものは此家の内に一人も

なし老婆さまも眉毛よまれるなど憎々しく言ひ放つて見返りもせずそれは御尤の御立  
 腹ながら是れまでのこと露ばかりも私知りての事はなしお憎しみはさることなれど申  
 譯の一通りお聞き遊ばして昔の通りに思召してよと詫入る詞聞きも敢へず何といふぞ  
 て、おや父親の罪は我れは知らぬ今まで通り嫁舅になりたしとか聞て呆れるなり考へて見よ  
 人非人の運平の娘を妻に持つ芳之助と思ふかよしや芳之助が持つといふとも我れ  
 ある以上は嫁にすること毛頭ならぬ汚らはし、運平の名思ひ出しても胸が沸くなり  
 況てやそれが娘を嫁にやと思ひも寄らぬことなり詞かはすも忌はしきに疾々歸らずや  
 お歸りなされエ、何をうちく、老婆さま其處を閉めなさいと詞づかひも荒々しく怒りの  
 面、色すさまじきを母は見かねてそれはあまりに短氣なりあの子の詞も一通りは聞てお  
 遣りなされませぬかと執成すをハタと睨んで汝までが同じやうに何の嚙語最早何事聞  
 く耳もなし汝が追ひ出さずば我れ自身にと止むる妻を突のけつ、病勞れても老の一徹  
 上りがまちに泣顔れしお高が細腕むづと取りつ力を極めて押出す門口お慈悲に一  
 言お聞き入れをと詫るも泣くも何の用捨あらくれし詞に怒りを籠めて嫁でなし舅でな  
 し阿伽の他人の來る家でなし何といふとももう逢はぬぞ、ハタとたて切る雨戸の闕くちし  
 は溝か立端もなくわつと泣く空に闇を縫ひ行く鳥の兩三聲。

## 第十三回

覺悟かくごの身みに今いま更さらの涙なみ見み苦くるしと勵はげますは詞ことばばかり我われれまづ拂はらふ險あやの露つゆの消きえんとする  
 命いのちか扱さてもはかなし此こゝ處まつざ松は澤につた新せん田ぞるが先みだい祖ぼし累よみ代なほの墓ほら所ら晝じゆ猶もく暗くき樹じゆ木もくの茂しげみを吹ふ拂きはふ夜よ  
 風かぜいと悲ひ慘さんの聲こゑをそへて梟ふくろの叫こゑび一段いちだんと物ものすごしお高たか決けつ心しんの眼まな光なたじろがずお心こゝろ  
 怯おとれかさりとは御ご未み練れんなり高たかが心こゝろは先さきほども申まをす通とほり決きめし覺悟かくごの道みちは一ひとつ二人ふたりの身みを  
 犠ぎ牲せいにしてもお前まへさまのお心こゝろ伺かふ先に生いきて還かへる念ねんはなし父てい御ごさまの今日けふの仰おほせ人にん非び人にん  
 の運うん平べいが娘むすめを嫁よめになどは思おもひも寄よらぬことなり芳よし之の助すけは兔ともあれ我われれ許ゆるさずと御ご  
 立た腹はらの數かず々々それいさゝかも御ご無む理りならねどお前まへさまと縁えんきれて此こ世よ何なんの樂たのしからずつ  
 らき錦にしき野のがこともあり所しよ詮せんは此この命いのちひとと覺悟かくごの道みちも同おなじやうに行ゆき逢あつてお前まへさ  
 まのお心こゝろ伺かへば其その通とほりとか今いま更さら御ご違ちが背はいのある筈はずなし私わたしは嬉うれしう存ぞんじますをと美み事ことに言い  
 放はなつて嚙かむ襦じゆ袢ばんの袖そで、未み練れんなどがあることかは我われれ男をとこの一いつ疋びきながら虚きよ弱じやくの身み  
 力ちから及およばず只ただにもあらで病やまひに臥ふす兩ふた親おやにさへ孝かう養やう、抱ほう持ちの不ふ十じふ分ぶんさ甲か斐ひなき身み恨みうらめ  
 しくなりて捨すてたしと思おもひしは昨日きのふ今日けふならず我われ々々二人ふたり斯かくと聞きかば流さ石うん運べい平べいが邪じやく

慳けんの角つのも折をれる心こころになるは定ぢやうなり我わが親おやとても其その通とほり一いつてつ徹こころの心こころ和やはらぎ寄よらば兩家りやうけ  
 の幸かう福ふくこの上うへやある我われ々くふたり世よにありては如何いかに千辛せんしん萬苦ばんくするとも運うん平べいに後こうくわ  
 悔いの念ねんも出でまじく況ましてや手てを下さげての詫わびごと何なんとしてするべきならずよしや膝ひざを屈まげ  
 ればとて我親わがおや決けつして肯肯れはなすまじく乞食こつじき非人ひにんと落魄おちぶるとも新田につた如ごときに此この口腐くちくきれ  
 ても助けを求もとむることはせずとそれ平生へいぜいの詞ことばなるもの盡じん未み來らいこの不和ふわの中なか解なける筈はずなし  
 數代すだい續つきし兩家りやうけのよしみ一朝いつてうにして絶たやさんこと先祖せんぞの遺旨あしにも違たがふことなり世よの人ひと  
 は愚ぐとも笑わらはん痴ちとも見みん、さりながら先祖せんぞに對たいし家いへに對たいする孝かうは二人ふたりが命いのちなり捨すて、榮はえ  
 ある身みぞと思おもへば何處いづくに殘のこる未練みれんもなしいざ身支度みじたくをと最期さいごの用意よういあはれ短みじき契ちぎりなるか  
 な井筒あづにかけし丈たけくらべ振ふりわけ髪がみのかみならねば斯かくとも如何いかしら紙かみにあね様さまこさへて遊あそ  
 びし頃ころこれは君きみさまこれは我われ今日は芝居しばゐへ行ゆくのなり否花見いやはなみの方が我われは宜よしと戯たはむれ交かは  
 せしそれひとも願ねがひの叶かなひしことはなく待まちにまちし長ちやう日じつ月げつのめぐり來きて見みれば果はか  
 しや世よは桑田さうでんの海うみともならねど變かはるは現げん在親ざいおやの心こころ、ましてや他人たにんの底そこふかき計けい略りやく  
 の淵ふち知るべきならねば陥おとしれられて後のちの一ひと悔くわい恨こん空むなしく吞のむ涙なみだの晴はれ間まは無なくて降ふりかゝ  
 る憂いう苦くと繋つながる、情じやう緒ちよに思慮しりよ分ぶん別べつも烏羽玉ぬばたまの闇やみくらき中なかにも星ほし明あかりに目めと目見合めみあ  
 せて莞爾にっことばかり名殘なごりの笑顏ゑがほうら淋さびしくいざと促うながせばいざと答こたへて流石さすがにたゆたはるゝ幾い

くぶんじおもさだ  
分時思ひ定めてツト立よりつ用意の短刀とり直せば後の藪に何やら物音人もや來つ  
ると耳を澄ますに吹き渡る風定かに聞えぬ扱追手にもあらざりけりお高支度は調ひしか取  
りみだ  
亂さんは亡き後までの恥なるべし心靜かにと誠める身も詞ふるひぬ慘まし、可惜青  
いねん  
年の身花といはゞ荅の枝に今や吹き起らん夜半の狂風、お高が胸先くつろげんと  
する此時はやし間一髪、まち給へとばかり後の藪垣まろび出で、利腕しつかと取  
をしたた  
る男誰れぞ放して死なしてと脆弱き身にも一心に振切らんとするをいつかな放さず、い  
はな  
や放しませぬ放されませぬお前さま殺しては旦那さまへ濟みませぬといふは正しく勘藏  
か、とお高の詞の畢らぬ内閣にきらめく白刃の電光アツと一聲一刹那はかなく枯れぬ  
連理の片枝は。

## 第十四回

こぼれ松葉の土になるまで二人ともにと契りしものを我ばかり何として後るべきと足ず  
りして歎きしが命果敢なく止められて再び見んとも思はざりし六疊敷の我が部屋をその  
儘の座敷牢縁の障子の開閉にも乳母が見張りの目は離れず況してや勘藏が注意

周到翼あらば知らぬこと飛ぶ鳥ならぬ身に何方ぬけ出でん隙もなしあはれ刃物一つ手に  
 入れたや處は異れど同じ道に後ればせじの娘の目色見てとる運平が氣遣はしき錦野と  
 の縁談も今が今と運びし中に此こと知られなば皆晝餅なるべし包まるだけはと祕し  
 かくして宥めてみつ賺してみつ意見に手をかへ品をかふれど袖の涙晴れんともせず兎もす  
 れば我も俱にと決死の素振に油断ならず何はしかれ命ありての物だねなり娘の心落附かす  
 に若くはなしと押しては婚儀をすゝめもなさず去るものは日々に疎しの俚諺もあり日を  
 だに經れば芳之助を追慕の念も薄らぐは必定なるべし心ながく時を待て春の氷に朝  
 日かげおのづから解けわたる折ならでは何事の甲斐ありとも覺えず誰れもく異見は言  
 ふな心の浮く話に氣をなぐさめて面白き世をおもしろしと思はするのが肝要ぞと我先  
 立ちて機嫌を取りつ慰めつ一方は心を浮かせんと力め一方は見張りを嚴にして細ひも一  
 筋小刀一挺お高が眼に觸れさせるな夜は別して氣をつけよと氣配り眼配り大方な  
 らねばぬしつか使ひの者も心を得て風の音をも只には聞かず鼠の荒れにも耳そばだてつ疑心は  
 暗鬼を生ずる奥の間に其人現在坐すを見ながら嬢さまは何處へぞお姿が見えぬやうな  
 りと人騒がせするもあり乳母は夜の目ろくく合さずお高が傍に寢床を並べ浮世雜談  
 に諷諫の意をこめつ可笑しく面白く物がたりながら沈みがちなる主の心根いぢらし



くも氣遣はしく離れぬ守りにこれも一つの關所なり如何にしてか越えらるべき如何にし  
 てか遁るべきお高髪とりあげず化粧もせず粧ひし昔の紅白粉は誰れが爲の色ならず君に  
 おくれて鏡の影に合す面つれなしとて伽羅の油の香りも留めず亂れ次第の花の姿やつれる  
 身を我と頼母しく、ならば此儘に死にたしと願へど命は心のまゝならず病むともなく煩  
 ふともなくつく／＼と眺めてつくづくと泣く涙と空とを意中の友として送らねど迎へ  
 ねど來るものは月改まるは歳ちりて返らぬ君を思へば何ぞ櫻の春しり顔に今歳も咲ける面  
 にくさよ又しても聞く堀切りの菖蒲だより車をつらねて見に行きしはそもいつの世の夢  
 になりて精靈柵の眞こもの上にも表だちては祀られずさりとは世の中うらめし  
 てつきあきよくさばもろしらたまつゆこた消えかぬる身を何と御覽じて何とお恨みな  
 照る月の秋の夜草葉に脆き白玉の露と答へて消えかぬる身を何と御覽じて何とお恨みな  
 さるべきにや過ぎし雪の夜の邂逅に二つなき貞心嬉しきぞとてホロリとし給ひし涙の  
 かほまめさきこし顔今も眼の前に存るやうなりさりながら思ふ心は幽冥の境にまでは通ずまじきにや無情  
 く悲しく引止められし命を未練に惜みてとも思召さん苦しきよと思ひやりては伏し沈み  
 おもいだ思ひ出してはむせ返り笑みとは何ぞ夢にも忘れて知るものは人生の憂きといふ憂きの數  
 ずく々來るものは無意無心の春夏秋冬落花流水ちりて流れて寄せ返る波の年又年今  
 日は心の解けやする明日は思ひの離れやするあはれ榮花の身にしたし娘にも綺羅かざら

せて我れも安心の樂隱居願はくは家運長久なれ子孫繁昌なれ兎角は身の上  
 凶事あらせじとの親心に引かへし願ひも逆さまながら今日身をすてんか明日こそは  
 と窺ふ心に怠りなけれど人目の關守何として隙あるべき此處に七年身はまだ籠中の  
 鳥。

## 第十五回

お父様にも勘藏にも乳母には別しての事いろくど苦勞をかけまして今更おもへば  
 恥かしいやらお氣の毒やら幼心のあと先見ずに程のない無分別さりながら盡きぬ命  
 かや事も無く助かりしを嬉しいとは思ひもせでよしなき義理だてに心ぐるしく芳さまのお  
 跡追ふてと思ひしは幾たびかさりとては命二つあるかのやうに軽々しい思案なりしと  
 後悔して見れば今までの事口惜しくこれからの身が大切になりました阿房らしい死  
 んだ人への操だて何に成ことでもなきを何時まで獨身で居る心が數へる歳の心細さは  
 ほどならばなぜ昔お詞そむいて厭ひしか我れと我が身知れませぬ母さまなしのお手一つに  
 御苦勞たんと懸けまして上の上にも又幾年お心休めぬ不料簡不孝のお詫は向後さ

つぱり芳さまのこと思ひ切つて何方への縁組なれ仰せに違背はいたしませぬ勘藏も  
 乳母も長の間の心づかひ嘸かしと氣の毒な私の心は今もいふ通り晴てみれば迷ひは雲霧  
 これまでの氣は少しもなし必ず心配して下さるなよと流石に心の弱ればにや後  
 悔の涙を目にたへてお高斯くとは言出しぬ歳月心を配りし甲斐に漸く此詞にま  
 づ安心とは思ふものゝ運平なほも油斷をなさず起居につけて目をそぐにお高は詞に  
 違ひもなく愁の眉いつしかとけて昨日にかはるまめくしき父のもの我がもの云へば更に  
 手代小僧の衣類の世話縫ひほどきにまで氣を用ひて浮々とせし様子に扱は眞に悔悟し  
 て其心にもなりぬるかと落附くは運平のみならず内外のものも同じこと少し枕を安  
 んじけりさるにても訝しきは松澤夫婦が上にこそ芳之助在世の時だに引窓の烟たえ  
 たりなりしを今はたいかに其日を送るや可惜若木の花におくれて死ぬべき病は癒たるも  
 のゝ僅か手内職の五錢六錢露命をつなぐ術はあらじを怪しのことよと尋ねるに澆季の  
 世とは聞くものゝ猶陰徳者なきならで此薄命を憐みてや恵むともなき恵みに浴して鹽  
 膾の苦勞は知らずといふなるそは又何處の誰れなるにや扱も怪むべく尊むべき此慈善家の  
 姓氏といはず心情といはず義理の柵さこそと知るは唯りお高の乳母あるのみ忍びく  
 の貢のものそれからそれと人手を換へて誰れと知らさぬ用心は昔氣質の一こくを立通

さする遠慮心痛おいたはしや右に左に御苦勞ばかり世が世ならばお嫁さまなり舅御  
 なり御孝行に御遠慮は入らぬ筈をと或時泣きしにお高同じく涙になりて私の心知る  
 ものは和女ばかり芳さまのことは思ひ切りても御兩親の行末が心配なり明日が日我  
 が身縁に付きなば兎に角自由は叶ふまじ其時たのむは和女ぞかし父さまのお心よく取り  
 て松澤さまとの中昔の通りにして欲しは是れ一つがお頼みぞとて兩手を合せて伏し拜  
 みぬ失せし芳之助を悼まぬならねど主の身の上猶さらに氣づかはしく陰になり日向にな  
 り意見の數々貫きてや今日此頃の袖のけしき涙も心も晴れゆきて縁にもつくべし嫁に  
 も行かんと言出でし詞に心うれしく七年越しの苦も消えて夢安らかに寝る夜幾夜ある  
 明方の風あらく枕ひいやりとして眼覺れば縁側の雨戸一枚はづれて並べし床はもぬ  
 けの殻なりアナヤとばかり蹴かへして起つ枕元の行燈有明のかげふつと消えて乳  
 母が涙の聲あわたゞしく嬢さまが嬢さまが。

渝らぬ契りの誰れなれや千年の松風颯々として血汐は残らぬ草葉の緑と枯れわ  
 たる霜の色かなしく照らし出だす月一片何の恨みや吊ふらん此處鴛鴦の塚の上に。





# 青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第一巻」新世社

1942（昭和17）年1月30日発行

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「改進黨新聞」

1892（明治25）年3月31～4月10日、4月12日、14日～17日

※初出時の署名は、「浅香のぬま子」です。

※「提燈」と「提灯」、「脊」と「背」、「小僧《こそう》」と「小僧《こぞう》」、「平生《ひごろ》」と「平生《へいぜい》」、「恥《はぢ》」と「恥《はじ》」の混在は、底本通りです。

※底本の編者による脚注は省略しました。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦

2014年10月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 別れ霜

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>